

2019-5 経営協議会議事概要

日時 令和2年1月24日（金）15:00～17:05

委員 駒田学長（議長）

志田，高木，西岡，向井，村本，渡辺

山本，緒方，尾西，梅川，伊藤（公），伊佐地，大高 各委員

列席者 富樫，野崎，橋本，鶴岡，吉本，富本 各副学長

服部監事，山中監事

◎新任委員の紹介

学長から新任委員の紹介があり，次いで伊佐地委員から挨拶があった。

◎議事概要の確認

2019-4の議事概要(案)について，了承された。

I 審議事項

1. 中期計画の変更について

尾西理事から，「資料：審-1，参考資料1」に基づき，「別表 収容定員」の変更に係る中期計画の変更について文部科学省へ提出する旨の説明があり，審議の結果，原案どおり承認された。

2. 人事労務に関する規程等の改正について

大高副学長から，「資料：審-2」に基づき，令和元年人事院勧告に伴う国家公務員の給与改定を受け，その内容について検討を行い，職員への影響，財務状況等を勘案して規程等の改正を行うほか本学の運用実態に応じた改正を行う旨の説明があり，審議の結果，原案どおり承認された。

II 報告事項

1. 令和2年度概算要求事項について

大高副学長から，「資料：報-1-1」に基づき，令和2年度国立大学関係予算案の概要についての説明があり，次いで，施設部長から，「資料：報-1-2」に基づき，2019年度施設整備費概算要求事業についての説明があった。

2. その他

(1) 三重大学統合報告書及び三重大X（えっくす）について

吉本副学長から，席上配布された冊子に基づき，12月に発行された「三重大学統合報告書」及び「三重大X（えっくす）vol.43号」についての紹介があった。

(2) ユマニテクプラザ5者協定締結一周年記念フォーラムについて
鶴岡副学長から、「資料：報-2」に基づき、2月に開催されるユマニテクプラザ5者協定締結一周年記念フォーラムについての紹介があった。

(3) 次回開催について
2020年3月17日（火）14：00から開催することを確認した。

Ⅲ 意見交換

1. 「国立大学改革方針」－三重大学の将来構想－について

尾西理事から、「資料：意-1-1, 意-1-2」に基づき、文部科学省に提出した「国立大学改革方針」調書における三重大学の将来構想の概要についての説明があった。次いで、緒方理事，梅川理事，山本理事から各分野の計画についての説明があった後，種々意見交換を行った。

<主な意見>

- 民間が大学と協力して成果が上がっている事例で，ある大学と会社が協力し，サービスマンの業務について動線を含めて全て調査し，見直した結果，1時間かかっていた作業が30分でできるようになったという新聞記事があった。企業も，大学と組んでそのような成果が上がり，大きく業務が改善されれば当然実利にも反映してくるだろうから，大学への寄附などもしようということになると思う。
- 少子高齢化が急激に進んでおり，鈴鹿市の人口も20万人を切ってしまったが，若い世代から30万都市を目指すのにどうしたら良いか考えて欲しいと提案されたので色々調べてみた。鈴鹿は，京都や伊勢神宮，中部国際空港まで1時間半以内で行ける位置にあるので，インバウンドの取組を進めれば，外国人観光客が年間30万人くらいは集まるという試算がある。鈴鹿サーキットでイベントがあると，近くに宿泊できないので名古屋に泊まる人が多いという状況もある。資源としても，椿大神社や，複数のゴルフ場，千メートル級の山もある。また，自動車産業の街だが，メーカーが亀山や津に出てしまって空洞化が起きているので，工業団地が必要ではないか，工業団地を造れば30万都市になる可能性があるのではないかという意見も出てきた。そのように色々なアイデアが出ているが，産業界も何かコラボして支援できればと思っているし，できれば三重大学にも支援していただければと思う。三重大学は人づくりをしており，少子高齢化やそれに伴う産業界の課題解決のために，その知恵や考える力という面からの，三重大学の役割は大きい。産業界がそれをあまり活用して来なかったのも問題ではないかと思われる。
- 新興国の大学が世界ランキングに上がってきている中で，日本の大学のプレゼンスはどんどん下がっており，大変大きな危機感を持っている。

- 説明していただいた将来構想については、リアルな感じが見えないという印象である。これから社会が激しく変わっていく中で、社会や産業、雇用がどうなっていくのかという未来像があって初めて、何をしなければいけないということが描かれないといけないと思う。一般論が多く、三重大学として将来こうなるから、こういう教育を重点的に行うということが聞けなかったと感じた。
- 産業界にいて、とても懸念していることの一つは、コンピュータサイエンスの領域で本当に人材がないということである。そのような人材は取り合いになっていて、海外に求めないといけないような状況である。三重大学には工学部があるが、データサイエンスの来年度予算が付かないというのはとてもショックである。もう一つは、人生100年時代と言われ、長く仕事をしなければいけないという状況の中、AIやIoTが仕事を代替していくと、人に求められるスキルもどんどん変わり、現に我々が持っているスキルも陳腐化していく。企業としても、そのような時代には何が必要なのか、といったことをリカレント教育していかないと考えている。これらの、非常に大きな危機感やニーズを感じていることに対して、日本の大学や三重大学がどうしていくのかということが非常に気になる。当然ながら、SDGsやESG投資、あるいはCSVということで、地域との共通価値をいかに作っていくかということはとても大事だが、それ以前に、社会がこうなるからこういう人材を輩出するということになれば、社会課題が何なのか見えてこない。是非ここは、三重大学として将来構想を出すのであれば、将来がどういう姿になるのか、そこからバックキャストして、どのようなプログラムを作りどのような人材を輩出すればいいのかを考え抜いていただきたい。
- 将来構想について、10年後20年後に三重大学はあるのかどうかという観点が抜けてしまっているのではないか。例えば、地域との共生や地域密着、地域貢献というのは、現在の三重大学にとっては非常に重要なことだが、それだけで良いのかと思う。人口減少がどんどん進み、三重大学を受験する学生の地域別の構成がおそらく2～3割減ってくる。受験者数が減らなければ、その分は質が低下してくるはずである。つまり、今のまま地域にばかり目を向けていて良いのかどうかということをもまず考えないと、三重大学の存続そのもの、あるいは学生の質の低下といった様々な課題が出てくると思う。説明していただいた将来構想は、三重大学のレベルが現状、あるいは現状よりも上がる前提になっているが、例えば、学生のレベルが仮に2～3割低下したらどうなっていくのか、という部分の発想がどうしても必要になってくると思う。国立大学といえども、コマーシャリズムからは避けて通れなくなっていると思うので、これからは視点そのものを全国に広げ、全国から優秀な学生が来てくれる大学を目指していくということが必要ではないかと考える。全国、あるいは海外から優秀な学生を集め、それから、このような構想を

進めていくというのが大前提と思われるので、この将来構想の「あるべき姿」の部分の前提として、もう少しグローバルや全国という視点を入れて大学運営をしていくということが必要ではないかと感じた。

→20年後に三重大学があるかどうかというのは難しい質問だが、南海トラフ地震による津波のリスクについては記述した。入学者については、現在の状況からのシミュレーションは行ったが、20年後というのは、まだ生まれてない子供のことなのでなかなか難しい。優秀な人材の減少といったことを考慮に入れるということは非常に大事と思う。

○応募学生が全国規模に広がるというのも一気には広がらないので、徐々に広がっていくような進め方をしていくと良いと思う。そのためには、三重大学だけでは無理なので、やはり三重県の理解を得、県全体として全国規模で知名度を上げ、若い学生が学びに来るといった地域としての魅力を発信していく必要があると思う。

○将来構想の、例えば教育の箇所、「反転学習、PBL型教育」の展開とあることから、アクティブラーニングを相当取り入れることが分かる。そこからは、三重大学が、想像力や思考力、行動力、コミュニケーション力、解決していく力に優れた学生を望んでいる、そのような学生を創っていきたい、と読み取れる。一方、「理系学生に対する文系教育、文系学生に対する理系教育」とあるが、それは、各学部において、一種の総合教育のような形で行うのか、それとも、国際基督教大学のように教養教育に力を入れ、なおかつ、アクティブラーニングを取り入れて、学生の基盤を作り、それを更に専門性の高いところに繋げていくという考えのようにも受け取れる。一つ一つは素晴らしいが、バラバラになっていて、それらが一つになった時にどのような学生をイメージしているのか、どのような人材を教育していこうとしているのかがはっきり見えてこない。青字で書かれたプラットフォームの整備の箇所と赤字で書かれた教育の箇所が、どのように結びついて、三重大学が今後どのように進んでいくのか、ということがもう少し反映されてくると、点から面への展開というのがはっきりしてくると思う。それぞれをどのように結びつけると4年間で何を学んでどのようになって社会に出ていける、あるいは大学院に進学してこのように繋がる、ということが描かれれば、三重大学で学ぶことの良さが見えてきて良いと思う。

○先ほど学生の質の話が出たが、入学試験で学生の偏差値が落ちてくるとそのレベルから入学した学生を教育することになるので、そのときは今まで教えていたことのレベルが変わる。偏差値をある程度上げると、県内だけでなく、全国から学生が多く集まってくる。すると卒業後は出身地に戻り、三重県に就職する人が減ってしまうこともあるが、偏差値が上がると、当然県内からの入学生のレベルも上がるので、入り口は大切だと思う。魅力があれば、愛知県からも全国からの学生も増える。是非そういったことも視野に入れていただければと思う。

- 三重県の小中学校の先生には、三重大学以外にも皇學館大学や県外の大学の出身者も多いと思うが、特に小学校6年間、中学校3年間のいわゆる一番の基礎教育を徹底的に勉強させるような先生を三重大学の教育学部で養成して欲しいと思う。小中学生9年間は、一般教養に属する教育だと思うが、これをもっと徹底的に勉強させる。その後、高校に入ればある程度自分が学問を選べるが、それでも高等教育として、一般的な教養を高めなければならない。そして優秀な人には三重大学に来ていただく。もちろん、県外の大学に行っても外国に留学しても良いと思う。
- ある財団で行っている研究費助成の審査では、色々な研究機関からの応募があるが、三重大学からは特に医学部と工学部からの応募が多い。基礎的、応用的、あるいは実用的な研究と様々である。あまりお金を必要としない研究もあるのだろうが、基本的に理系の分野では研究費が必要である。だから、アメリカやロシア、中国のような、集中と選択ができる国家は非常に研究も進む。文部科学省も大学に対して集中と選択を行っているが、現状では三重大学の予算が飛躍的に増えるようなことにはならないと思う。ではどうやって研究費を獲得するかということだが、寄附がある。欧米には有名大学に寄附をするという文化がある。日本でも、寄附の文化が育まれてきているとは思いますが、やはり、欧米に比べれば、日本は極めて民主的な国なので大富豪もほとんどおらず、根付くところまでいかない。そのような中で、三重大学はどうしたら良いかということだが、例えば、寄附の文化のある国の留学生をたくさん受け入れたら良いと思う。日本に寄附の文化が定着するのには時間がかかると思うので、海外の人で大口の寄附をしてくれる人を見つけ、それを学究の資金にするというのも一つの考えであろうと思う。そういう中から、世界に通用する人材が、三重大学からどんどん輩出されるように、先生方には研究と同時に学生を厳しく鍛えていただきたい。
- 三重大学では英語教育を集中的に実施することに成功しているという。これをどんどん広げて欲しい。今の総理大臣があれだけ活躍している理由の一つに、英会話力があると思う。英会話ができれば、コミュニケーションにおいて色々なことができると思うので、そういう点でも英語教育は非常に重要だと思う。
- 自分も、やはり日本という視点が欠けているのかなと思った。県立大学ではないのに、三重県だけに集中しているという気がした。人口を見ると、昨年生まれた子供は87万4千人しかいない。現在の18歳人口は約120万人だが、18年後には確実に30数万人減るわけである。それと同時に、1億2千何百万人いる人口が、2050年には恐らく1億人くらいになり、その後もどんどん減っていくと予測される。人口減少も、あまりにも急激に進んでいる。国の予算も減るだろう。これ以上人口が減少していったら三重県自体があるかどうか分からないと思っている。州制度ができて、県単位がなくなってしまうかもしれない。だから、三重県

だけで生き残れば良いが、国立大学が何校生き残れるのか、私学も600あるが何校残るのか、財政の面からそうなるという可能性は十分あると思う。名古屋大学と岐阜大学がアンブレラ方式により経営統合となるが、三重大学もそこに入るのも一つの考えだと思う。今回のアンブレラ方式と、法人化の頃の国立大学の再編・統合は「朝三暮四」であり、そのような形で進まざるを得ないのかなと思う。どうしたら本当に生き残っていけるのだろうかというのは、日本自体も、三重県も、自分が住んでいる市町も考えて欲しいと思っている。

○世の中は本当に凄い変革期である。パラダイムシフトと言われるが、もう全体が変わりつつある。産業構造も大きく変わるし、三重県で出来ることというのは、やはり日本全体の中で考えないと発想が出てこないと思う。ある鉄道会社の社長が、自分が鉄道事業をしているのに、技術革新や人口減少で、これからは人間や物を大量輸送したりする仕事や高速道路もなくなるかもしれないと語っている新聞記事を読んで、すごい人だと思ったが、そのくらい大きな変革期を迎えている。世の中はもう画期的に、この10年20年の間に変わると思う。国立大学もそれを見定めてやっていかなければいけないと思う。ただ、人生100年時代については、百年も生きられやしないし、80歳過ぎまで働くのも無理ではないかとは感じている。私学の医療科学大学の場合だが、医療と福祉の枠を超えて、今後必要となるような分野の学部を作っても良いかもしれないと考えている。

○日本ということを考えるのであれば、あまり三重県への就職に拘らない方が良いと思う。

→基本的には、優秀な学生がそれぞれキャリアを積んで、社会で活躍するのが大前提なので、三重県にいななければいけないというわけではない。ただ、大企業に就職するというのも良いが、三重県にも素晴らしい企業があるので、選択がきちんとできるような環境だけは作ってあげたいと思っている。一方で、例えば、医者のように、いなくなると地域の人が医療を受けられなくなるということが起こるので、県に残るような施策をしなければいけないこともある。

→配布資料のとおり、知事からも、「県としても引き続き若者の県内定着を促進していく。県内唯一の総合国立大学である三重大学に、今後も地方創生を推進する人材の育成や研究成果の社会への還元、並びに社会的課題を解決に導くシンクタンク機能の強化や研究者の量的・質的拡大等の推進を期待する。地域ニーズもふまえた地方大学における定員の増加について、引き続き、学生定員規模の拡大に向けて取り組まれることを希望している。それらの実現に向けて三重大学と連携していきたい。」との意見をいただいている。

→県からの期待を裏切らないように頑張りたいと思う。三重大学は国立大学法人なので三重県だけのものではない。ただ、三重県のことを考える

国立大学法人は三重大学しかないので、三重県のこと考えなければいけないと思っている。定員増加の希望については、これは簡単には増やせない。定員を増やす方法を考える際に、どうして、どのように、どのような人材を育成するのか、その卒業した人材がどこへ行くのか、ということ考えないと、定員増は認められないので、逆に言うと、そういうことを考える機会にもなると思う。三重県の大学の学生定員は日本で一番低いので、三重大学も何とか定員を増やさなければいけないということをお願いしようとは思っている。本日、委員の方々にいただいた意見はもっともなことである。文章の書き方については、もう少し分かり易く書く必要があるかと思う。三重大学の今年のキーワードは「進化」なので、三重大学が本質的に「化ける」ということが、将来構想の大きなポイントである。今までの大学とは違った大学になりたいということ念頭に置いて、文部科学省に大学のやりたいことをしっかり伝え、ご理解いただくようにしたいと思う。

以上